

## 英国政府の湾岸人観光招致と女性の消費

東京大学 総合文化研究科 特任准教授 辻上 奈美江

この夏、ロンドンは湾岸諸国からの観光客で大賑わいだった。英国国家統計局の発表によれば、英国を訪問した外国人は2016年7月のみで380万人で、昨年比で2パーセント上昇した。同期間に外国人訪問者が支出した金額は25億3,000万ポンドで、支出額も昨年比で4パーセント上昇している<sup>(1)</sup>。隣国のパリでは、テロの影響のために、観光名所でも閑古鳥が鳴いていたこととは対照的だった<sup>(2)</sup>。なかでもロンドンで目立っていたのが、湾岸からの観光客であった。本稿では、英国政府の湾岸人観光客招致活動に着目しながら、本センターニュース7月号「[サウジアラビアの女性の消費と起業—商業インフラの発展と女性化に関する考察—](#)」に引き続き、夏季休暇中の湾岸女性の消費について現地調査に基づく報告を行う。

### 1. 湾岸からの観光客で賑わうロンドン

英国政府観光庁「ヴィジット・ブリテン (VisitBritain)」によれば、湾岸諸国からの観光客はここ数年伸び続けており、2015年にクウェート、カタール、サウジアラビア、アラブ首長国連邦（以下、UAE）から英国を訪れた人は67万5,000人に達した。英国は2014年からUAE、カタール、オマーンおよびクウェート国籍者の6ヵ月以内の英国訪問についてビザを免除している。ビザ免除が奏功したのか、2015年の湾岸諸国からの訪問者は前年比で20パーセント増加した。また湾岸諸国からの訪問客の支出総額は15億ポンドで、前年比で10パーセント増加している。ビザ免除措置はないものの、サウジアラビアからの訪問客が最も多く、14万7,000人を記録した。サウジアラビアからの訪問者数は前年比で2パー

- 
- (1) 英国国家統計局 (Office for National Statistics) ホームページ  
<https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/leisureandtourism/bulletins/overseastravelandtourism/provisionalresultsforjuly2016>  
最終閲覧日2016年10月31日
- (2) パリでは今年5月までにホテル収入が14パーセント減少した。“French Tourism Slumps as Terror Attack Spook Foreign Travelers”, Bloomberg, August 8, 2016.  
<http://www.bloomberg.com/news/articles/2016-08-07/french-tourism-slumps-as-terror-attacks-spook-foreign-travelers>  
最終閲覧日2016年10月31日

セント増、支出額は52パーセント増となり、5億5,600ポンドであった。これによって2015年、サウジアラビアは英国のインバウンド対象国トップ10の仲間入りを果たした。クウェート、カタール、サウジアラビア、UAEからの訪問者は、一回あたり2,200ポンドを支出する「ハイエンド層」であり、英国政府観光庁は2016年10月26日、湾岸諸国からの観光客招致のための活動を開始したと発表した<sup>(3)</sup>。同観光庁によれば、2015年の一回あたりの支出額は、サウジアラビアからの客が世界一高い<sup>(4)</sup>。

湾岸諸国からの観光客について示した先のデータには、湾岸諸国に居住する外国人も含まれている。そこで湾岸6ヵ国に居住し、同国籍を有する人（ここでは便宜的に「湾岸人」と呼ぶ）に限定すると、いくつかの興味深い特徴が浮かび上がってきた。湾岸人の英国への観光客は2006年の13万人からほぼ右肩上がりに増え、2015年には31万人を超えた。10年間で2.3倍に増えたことになる。2015年の彼らの英国平均泊数は18.34泊で、一回の滞在の平均支出額は3,497ポンドであった。湾岸人のみに限定すれば、一回あたりの支出額は外国人を含む湾岸諸国からの観光客の支出額（2,200ポンド）の1.6倍程度に押し上がる。湾岸人の滞在時期は7月から9月に最も集中しており、年間を通じた訪問の4割弱がこの時期で占められている。湾岸諸国の中で最も訪問者数が多かったのがサウジ人で、2015年の訪問者数は11万人を超えた。サウジの総人口のうちサウジ国籍を有する人は2,000万人を超えているので、サウジ人のうち200人に1人が夏の休暇に英国を訪問した計算になる（表1参照）。「200人に1人」とは、感覚的にはそれほど多くないかもしれないが、物価の高い英国を訪問できるのは、富裕層から上位の中間層に限られる。この夏、英国に滞在したあるサウジ人女子大生は「親戚やクラスメイトがこぞってロンドンに旅行に来ている」と述べたほど、英国旅行は富裕層に人気があった。人口に占める割合の観点からより興味深いのはクウェートである。クウェートの人口は2011年時点で307万人であり、このうちクウェート国籍の人口が109万人である。比較するデータの時期は少しずれるが、2015年に渡英したクウェート人は9万人であったので、人口の8パーセント程度が渡英している

---

#### 筆者紹介

2008年神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程修了。博士（学術）。日本学術振興会特別研究員、高知県立大学講師などを経て現職。

著書に『現代サウディアラビアのジェンダーと権力』（福村出版、2011年）、『イスラーム世界のジェンダー秩序』（明石出版、2014年）、共著に『中東政治学』（有斐閣、2012年）『中東イスラーム諸国民主化ハンドブック』（明石書店、2011年）『グローバル政治理論』（人文書院、2011年）、共訳に『中東・北アフリカにおけるジェンダー』（明石書店、2012年）『21世紀のサウジアラビア』（明石書店、2012年）など。

専門は中東地域の比較ジェンダー論および地域研究。

---

---

(3) <https://www.visitbritain.org/visitbritain-launches-campaign-grow-inbound-tourism-gulf>  
最終閲覧日2016年10月31日

(4) “Market Growth and Rank from 2003-2015” *Visit Britain*,  
<https://www.visitbritain.org/inbound-tourism-trends>  
最終閲覧日2016年10月31日

表1 湾岸からのイギリス訪問者

国名	訪問者数 (人)	一人1回当たりの支出額 (GBP)	泊数	1泊当たり支出額 (GBP)
バーレーン	7,167	1,942	10.89	178
クウェート	90,319	3,102	18.76	165
オマーン	16,250	2,378	29.36	81
カタール	31,224	2,835	17.11	166
サウジアラビア	110,189	4,345	21.2	205
アラブ首長国連邦	49,563	2,912	10.4	280
湾岸合計／平均	304,712	2,919	17.95	179
参考：日本	173,308	1,169	10.77	109

出典：英国政府観光庁ホームページを参照し、筆者作成。

計算になる<sup>(5)</sup>。一回あたりの滞在時の支出が最も多いのがサウジ人の4,345ポンドで、クウェート、UAEがそれに次ぐ。なお、湾岸諸国の一人当たり国民総所得は、カタール、クウェート、UAE、サウジアラビア、バーレーン、オマーンの順となっている（表2参照）。英国での支出額はそれぞれの国民の豊かさに必ずしも比例するわけではないが、湾岸諸国内

表2 湾岸諸国の一人当たり国民総所得

国名	一人当たり国民総所得 (購買力平価, USD)
バーレーン	39,140
クウェート	79,970
オマーン	37,340
カタール	140,720
サウジアラビア	54,730
アラブ首長国連邦	70,570
参考：日本	38,870

出典：世界銀行 Worldbank Indicators より筆者作成  
<http://data.worldbank.org/indicator>

(5) クウェートの人口については、State of Kuwait Central Statistics Bureau. “2016 Statistics Review” を参照した。  
[http://www.csb.gov.kw/Socan\\_Statistic\\_EN.aspx?ID=19](http://www.csb.gov.kw/Socan_Statistic_EN.aspx?ID=19)  
 最終閲覧日2016年10月31日

では一人当たり総所得の少ないバーレーンとオマーンについては、英国での支出額も少なく、これらの国が先の英国の観光促進キャンペーンの対象外となっているのは納得がいく。他方で、オマーン人は湾岸人のなかでは滞在日数が最も長い（29.36日）。オマーン人は、他の湾岸人より支出を抑えつつ、より長期間英国に滞在していることがうかがえる。もっとも泊数が少ないのが、UAE人で10.4日だが、1泊あたりの支出額は6ヵ国中で最も高額である。UAE人は、短期間の滞在中に高額支出が見込める客ということになる。一方、一人当たり総所得が世界一とされるカタール人については、それほど目立った数値は見られず、総支出額、滞在泊数、1泊あたりの支出額のいずれも6ヵ国の平均値程度であった。

ちなみに、日本に居住する日本人の渡英者数は2006年の30万人強からほぼ右肩下がり、2015年には17万人強であった。2015年の平均泊数は10.77日、1回あたりの支出額は1,169ポンドである。1泊当たり109ポンドの支出となり、宿は1泊70～80ポンド、残りの30～40ポンドを食事や観光、買い物に費やした程度だろうか。ロンドンで宿泊したと仮定すれば、宿は簡素なB & B、外食は1日1～2回程度という節約志向が主流であることがうかがえる<sup>(6)</sup>。

## 2. 英政府の宣伝活動

湾岸人は総じて消費性向が高い。たとえば2013年のサウジ人の平均世帯収入は月額13,610リヤル（1リヤル＝28円程度）であるのに対して、平均世帯支出は月額15,367リヤルであった<sup>(7)</sup>。高い消費性向に加えて、湾岸人は、個人ではなく家族や団体に旅行する傾向がある。家族で旅行する場合にも、核家族ではなく祖父母やオジ、オバ、イトコなど大家族とともに出かけることが多い。1団体の旅行は少なくとも5～10人単位であるので、インバウンド客1団体を獲得すれば、17,500ポンドから35,000ポンド程度の支出を期待できる。本原稿執筆時である11月2日現在では、1ポンド127円程度というポンド安状態であるが、それでも円換算すれば1団体で220万から440万円支出している計算になる。インバウンド客を招致したい国にとって、湾岸人は、大勢でやってきて高額支出してくれる良い客であるに違いない。

多くの湾岸人が渡英するようになった要因のひとつに、湾岸諸国から英国への留学生の増加が考えられる。湾岸諸国から英国への留学生は1998年には4,550人、2003年には6,450人であった<sup>(8)</sup>。だが、その後、留学生数は飛躍的に増加して、2014/15年には、オ

---

(6) Visit Britain のホームページでは、一回当たり支出額の算出根拠は明らかにされていない。たとえばクレジットカード利用額から算出しているとすれば、現金決済分が少なめに見積もられている可能性もある。

(7) General Authority for Statistics “Household Expenditure and Income Survey1434 H (2013)”, p. 28.

マーンから18,530人, UAE15,490人, サウジアラビア8,360人, クウェート6,875人, バーレーン3,115人, カタール2,280人で, 合計すると54,650人が留学している<sup>(9)</sup>。湾岸人の英国への渡航目的は, 67パーセントが休暇, 9パーセントが商用, 13パーセントが友人や親戚を訪問, 4パーセントが勉学目的である<sup>(10)</sup>。留学生が増えれば, 彼らを訪ねる親戚や友人が増えるのは当然の結果である。

英国政府は, この機会を巧みにとらえ, 多くの湾岸人の招致に成功している。英国観光庁のホームページで, 同営業部長は「英国は湾岸からの訪問客にとって最も人気のある国で, 最高級のブティックや百貨店での買い物から, 国内各地の文化や遺産まで幅広く楽しめる」と自信を持って語っている。2016年6月には, 英国政府観光庁は, サウジ人の人気旅行ライターであるアブドゥッラー・アル＝ジュムアを起用し, 英国の名所を魅力的に伝える, 全6話にわたる YouTube 動画の配信を開始した。第一話のロンドン編では, アル＝ジュムアは, ケンジントン宮殿のすぐそばの5つ星アパートメントに到着する。ロンドンの高級住宅街として知られるケンジントン周辺は, 湾岸人に人気のエリアである。このあたりで不動産を賃貸・所有する豊かな湾岸人も少なくない (写真1参照)。YouTube 動画で紹介されたこのアパートメントは, 好立地に加えて1～3の寝室を備えているため, 大家族で比較的長期間滞在する湾岸人に適している。

アパートの紹介が終わると, 次は「ロンドン・ヘリ」に乗り込む。テムズ川上空を遊覧するロンドン・ヘリは乗り合いなら一人150ポンドから, 貸切なら1,000ポンドから乗機できる。さらにロンドン郊外のワーナー・ブラザーズ・スタジオ・ツアーへと向かい, ハリーポッター制作の舞台裏を見学, さらにミュージカル『チャーリーとチョコレート工場』を鑑賞して1日が終わる。全6話のうち半分は, オックスフォードや, シェークスピア生誕の地ストラッドフォード・アポン・エイボンなどの地方都市を紹介している。いずれも富裕層の若者向けのアトラクションやエンターテイメントが中心であり, 若年層人口の割合が多い湾岸諸国の人口構成を考慮し, 子連れや若者をターゲットの中心に据えたことがうかがえる。だが同時に, 女性に関心を示しそうな洋服や香水の買い物や, 成人男性が興味を持ちそうなジェームズ・ボンドが映画の撮影で使用した希少価値の高い高級自動車の展

---

(8) British Council. 2004. *Vision 2020: Forecasting International Student Mobility a UK Perspective*. British Council. P.13.

[http://www.internationaleducationgateway.org/Vision\\_2020\\_International\\_Students\\_UK\\_Perspective.pdf](http://www.internationaleducationgateway.org/Vision_2020_International_Students_UK_Perspective.pdf)

最終閲覧日2016年11月10日

(9) 英国高等教育統計局 (HESA) ホームページより

<https://www.hesa.ac.uk/>

最終閲覧日2016年11月10日

ちなみに2014/15年の英国への日本人留学生は1,295人であった。

(10) 前掲 “Market Growth and Rank from 2003-2015” より。



写真1：湾岸人向け不動産の賃貸・管理広告  
(サウスケンジントンにて筆者撮影)

示場の紹介など、幅広い層にアピールすることも忘れていない。

湾岸からのインバウンド客の増加をつぶさに把握した英国政府が、湾岸で大ブレイクしている旅行ライターを起用したことも注目に値する。アブドゥッラー・アル＝ジュムアは、1987年リヤド生まれの自称「フラッシュパッカー」である。「フラッシュパッカー」は裕福なバックパッカーとも言われ、アル＝ジュムア自身も、かつて英国のテレビ番組で「金持ちな若者」として紹介された経験を有する。サ우드王大学、マンチェスター大学で学び、ハーバード大学を卒業したと紹介されているアル＝ジュムアは、2011年7月からインスタグラムで写真の投稿を開始し、これまで2,000件近くの写真・動画を投稿し、インスタグラムのフォロワー数は41万人を誇る。これまでに訪れた国は、ヨーロッパ諸国、北欧諸国、アメリカ、中東諸国など数多い。最近では、中南米や東南アジアなどの開発途上国へも足を運んでいる。アル＝ジュムアは自然の美しさを切り取った風景写真が得意で、諸外国の写真に加えて、サウジ国内の写真も投稿してきた。人気の高まりを受けて、2013年には著書『あるサウジ人のヨーロッパ旅行記』を出版したほどである。筆者の湾岸人の知り合いのなかでは、特に若い女性に人気がある。

休暇時の家族の旅行先は、最終的な決定権は稼ぎ手である父親や夫が握っていることが多い。ただし、父親や夫が旅行先を決める前に、妻や子どもが希望する旅行先について交渉を試みることがある。アル＝ジュムアを起用した動画でSNS世代の若者や女性の関心を

惹き付けつつ、ヘリや希少価値の高い自動車を紹介するなど、旅行先の決定権を握る成人男性へのアピールもしているのは、このような家庭内での意思決定過程にも配慮していることがうかがえる。

### 3. 湾岸人の英国渡航の主眼は「買い物」

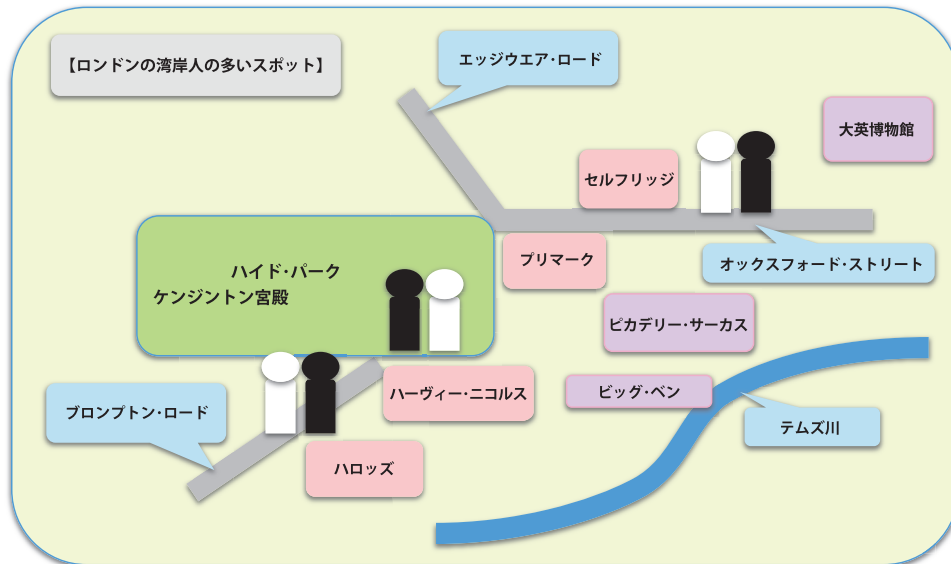
2016年7月から8月にかけて、筆者は英国滞在中の湾岸人に関する現地調査を行うために渡英した。湾岸人が押し寄せるロンドンは、ここ数年の夏の風物詩と化しているが、今年には特にその割合が多いように感じた。

英国が例年より多くの湾岸人を惹きつけた理由はいくつかありそうだ。英国では、6月23日に行われた国民投票で欧州連合からの離脱が決定し、急激なポンド安に陥った。湾岸諸国の通貨は基本的にドルペッグ制なので、湾岸人にとっては割安で旅行できる機会が訪れた。また、湾岸諸国では今年は7月6日から11日間のラマダーン明けの休暇が始まったのだが、その後、連続して夏季休暇に突入する人も多かったようだ。まとまった休暇を英国で過ごす家族に加えて、英語教育のためにロンドンの語学学校に子どもを送り込んだ湾岸人もいた。さらに治安上の安心感も彼らの渡英を後押しした。ヨーロッパ各地ではこの夏テロが相次いだが、英国ではここ数年、テロは起きていない。フランスのようなヴェール着用禁止のルールもなく、文化的な摩擦への懸念が最小限に抑えられたことも、英国の旅行先としての魅力だったと考えられる。

現地調査では、湾岸人が集まりそうな場所とそうでない場所について、現地在住のアラブ人らから情報を集め、できるだけ多くの場所を、時間帯を変えながら複数回訪問した。湾岸人を多く見かけたのは、高級百貨店ハロッズやハーヴィ・ニコルスがあるブロンプトン周辺、そして別の高級百貨店セルフリッジズなどが並ぶオックスフォード通りであった(図1参照)。対照的に、美術館や博物館、劇場では、湾岸人を見かけることは滅多になかった。たとえばオックスフォード通りの百貨店セルフリッジズは、明るい色のヒジャーブを着用した女性で溢れかえっていた。黒い長衣アバヤを着用した人は少なかったが、彼女らのアラビア語方言から湾岸出身者であることは一目瞭然である。彼女らの多くが有名ブランドのバッグやスカーフで着飾っていたことも、湾岸人らしさを強調していた。

オックスフォード通りから Hyde Park を抜けた先にある高級百貨店ハロッズとハーヴィ・ニコルスでも同様に湾岸人女性が目立った。この辺りを歩く湾岸人は、オックスフォード通りの湾岸人よりもさらに高級志向が強いのか、高価な洋服や装飾品を身につけている人が多い。彼女らは最低でも1, 2個は、ハロッズかハーヴィ・ニコルスの買い物袋を提げている。湾岸人が買い物に出かける夕方ともなれば、百貨店内の湾岸人の割合はさらに増す。百貨店内のネイルサロンでマニキュアを塗ってもらっている女性のほとんどは湾岸人で占められており、化粧品店も湾岸人女性の買い物客が多くの割合を占める。化粧

図1 ロンドン地図



出典：筆者作成

品については湾岸諸国でも販売されているメーカーがほとんどであるが、メイクに関心のあるサウジ人女子大学生によると「品揃えと店員の商品知識が豊富」であることが、英国で化粧品を購入する理由だという。サウジアラビアでは、つい数年前まで化粧品を販売するのは外国人男性店員だった。彼らはセールスには長けていたかもしれないが、商品の実際の利用者ではない。ロンドンでは、商品の利用者でもある女性店員が、最先端のメイク方法を教えてくれる。客は商品を買っているのだが、実際にはサービスに対する対価を支払っているのである。ドバイから観光に訪れたあるファッション・デザイナーの女性は、熱心に化粧品店の商品を見ていた。ロンドンで仕入れたファッション情報は、帰国後、ビジネスに活かされるだろう。

このように、消費者として存在感を有しているのは、湾岸人女性である。高級化粧品・香水店の店員によれば、湾岸人は香水を多く購入する傾向があり、一度に複数の商品を購入する人が多いそうである。また別の高級香水店の店員によれば、客の3割程度は湾岸人で、彼らは1点が70～100ポンドの商品を4、5点購入するのが一般的だという。このことは帰国時、さらに明確になった。帰路、パリのシャルル・ド・ゴール空港の付加価値税払い戻しカウンターに並んでいた人の7～8割は湾岸人だったのである。あるクウェート人女性は、免税書類を束で持ち込んで400ユーロ強の払い戻しを受けていた。付加価値税の還付率が12パーセントだと、4,000ユーロ以上の買い物をしたことになる。別の湾岸人女性も、払い戻し額は不明だが、免税書類を10枚以上持ち込んでいた。付加価値税の払い戻しを受けられるのは一部の商品に限られるので、彼女らがヨーロッパで高額支出していることは明らかだ。

ロンドンでは、このような空前の「湾岸ブーム」に乗って、商業インフラのアラブ化も





写真2：アラビア語対応可能な薬局  
写真に写り込んでいる歩行者もほぼ湾岸人  
(ブロンプトン通りにて筆者撮影)

進んでいる。ハロッズは2010年にカタールの政府系投資ファンドによって買収されたことで知られているが、商業インフラのアラブ化はハロッズ周辺にも浸透している。ハロッズから伸びるブロンプトン通りにはアラビア語名の看板を掲げた薬局やアラブ料理屋、水タバコが吸えるオープン・カフェが並んでおり、買い物の合間に利用する湾岸人も多い。医薬品を扱う薬局では、アラビア語で商品説明できることの付加価値は高い。ある薬局では「24時間医師による対応可能」や「医師による診断書出せます」といったサービス内容をアラビア語で表記した看板を道に立てかけていた(写真2参照)。イラク系クルド人移民が経営する別の薬局では、基本的に客は世界中から訪れるので、客層を湾岸人にのみ絞っているわけではないとしつつも、薬局にアラビア語の名称を付けることで、アラビア語で対応できる薬剤師がいることを示すことができるという。実際に筆者がこの薬局を訪れている間にも、湾岸人が医薬品やサプリメントを物色している様子だった。湾岸人に最もよく売れる商品として店員が教えてくれたのは、マレーシア産の男性向け滋養強壮剤だった。湾岸諸国では入手不可能だという。

湾岸人は、これらの高級百貨店とその周辺のみならず、2ポンドでTシャツが買えるプライマークのような量販店にも多く見られた。他方で、古くからアラブ人街として知られるエッジウェア通りでは、アラブ人は多く見かけたものの、湾岸人の割合は極めて少ないと感じた。エッジウェア通りにはアラブ系のカフェやレストランが並んでいるが、英国ら

しさはない。短期滞在者がロンドンのアラブ風カフェやレストランに価値を見出さないとしても不思議ではない。

#### 4. ロンドンでのナイトライフと女性のヴェール

実際に街中にいる湾岸人の国籍や、渡航の目的は何かを知るため、複数の湾岸人に声をかけてみたところ、国籍としてはクウェート人、サウジ人が多かった。そのほか、少数のUAE人とバーレーン人にも遭遇したが、筆者が声をかけた中にカタール人とオマーン人はいなかった。

30歳代後半から40歳代の女性4人は、英国に留学中の息子に会うのが渡英の第一の目的だと答えた。あるクウェート人女性には7人の子どもがいるが、長男が今年、英国の大学を卒業するので6人の子どもと夫の合わせて8人で渡英したという。別のクウェート人女性は、2人の息子が英国に留学しており、毎年ロンドンを拠点に家族旅行に出かけるという。今年もスペイン南部のマルベリヤ海岸に旅行し、その後またロンドンに戻って5日ほど過ごしてからクウェートに戻るそうである。3人の子どもを語学学校に通わせるためにロンドンを訪れたサウジ人夫婦もいた。彼らは、語学学校との契約や子どもの宿泊先を決めるため最初の1週間程度ロンドンに滞在し、10週間の夏期講習が終わる頃にまたロンドンに子どもたちを迎えに来る予定であるという。

避暑地としての魅力もある。ロンドンの中心にある公園ハイド・パークでは、子どもを



写真3：行き交う人の大半は湾岸人（ハイド・パークにて筆者撮影）

遊ばせ、あるいは散歩をするために訪れる湾岸人を数多く見かけた。広大なこの公園を歩き交う人の大半が湾岸人で占められていることもあった(写真3参照)。湾岸諸国の夏の気温は50度近くまで上がるのに対して、ロンドンの夏はおおむね20度台で推移している。年間を通じて気温が高く、歩道も整備されていない湾岸諸国にはない夏の楽しみ方なのだろう。

若い男女のなかには、ロンドン滞在中の恋愛に関心のある人もいるようだ。ブロンプトン通りは、夜10時頃になると湾岸人でますます賑わい始める。この時間帯にブロンプトン通りを闊歩しているのは、男女ともに若く、派手な装いの人が多い。女性たちは、ゆるやかにヴェールを着用している人もいるが、髪を隠していない人もかなりの割合を占める。未婚と思われる彼女らが、どのように親の目を盗んで外出しているのかは不明であるが、明らかに異性との交流の可能性を探っているように見える。湾岸人男性たちは、路上で欧米系の女性をナンパしていた。

先述の10週間の英語講習を受けるために渡英したサウジ人女子大学生は、夜間にブロンプトンを闊歩する女性に否定的な見方を示した。彼女はサウジ国内で着用しているアバヤは着用していないものの、髪を隠すヴェールをきっちりとかぶり、夜間の外出を極力避けているという。他方で、サウジからロンドンを訪れている彼女の女友達のなかには、夜間にヴェールを着用しないでブロンプトン通りで遊んでいる人もいるそうである。顔を隠さない理由について、近年では女性が顔を出して写真撮影し、SNSで共有する機会が増えたことが影響していると述べた。多くの女性はこれらの写真を家族や親しい友人に限定して公開しているが、現実味を帯びないサーバー空間で顔写真を公開することに抵抗を感じない女性もいるという。若い女性たちにとって、夏のバカンスもSNS同様に、現実社会とは切り離された経験なのかもしれない。

## 5. おわりに

英国は、ビザ免除や広報活動を通じて、過去数年間で湾岸人の招致に成功してきた。湾岸からの留学生の獲得が、英国訪問客をさらに増やしていることも注目に値する。そして、サウジアラビアにおける女性の消費と起業について論じた拙稿でも指摘したとおり、海外でもまた女性が消費者として存在感を有している。彼女らのなかにはファッション関係の起業家も含まれ、ロンドンで仕入れた情報は、湾岸諸国への帰国後にビジネスに活かされることになる。

ところで、日本政府観光局(JNTO)では、訪日外客数のうち湾岸諸国は「その他アジア」としか分類されておらず、湾岸人の訪問者数や目的、支出額はわからない<sup>(1)</sup>。2009年

(1) 日本政府観光局ホームページより

[http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/tourists\\_2015.np.pdf](http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/tourists_2015.np.pdf)

のラマダーン月に日本の文化や社会を紹介した「ハワーテル」が放映された時には、日本への関心が高まったこともある。アブドゥッラー・アル＝ジュムアのようなインフルエンサーを活用して、日本ブーム再燃を図るような計画が練られても良いのではないだろうか。もちろんその際に、女性を消費者の主要ターゲットとして捉える必要がある。

\*本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。